

**教職課程における特別支援教育推進の方策（２）**  
**－教職実践演習の模擬授業における特別支援教育の手法を取り入れた**  
**学部対比の指導案作成を通して－**  
**Measures to Promote Special Need Education**  
**in Teacher Training Courses(2)**  
**－ Incorporated Special Needs Education Methods in Mock Classes for**  
**Teaching Practice Training Through the Creation of Teaching Plan for**  
**Faculty Comparisons －**

八木 悟<sup>1</sup>  
Yagi Satoru<sup>1</sup>

## 1 はじめに

2007年、改正学校教育法が施行され、特別支援教育が法的に位置付けられ正式にスタートして早17年が過ぎようとしている(文科省, 2007)。我が国は2007年に障害者権利条約に署名して以来、この特別支援教育推進を始め、様々な法的整備を進め、2014年には障害者権利条約が日本で批准され、共生社会へ向けて歩み出されてきた(内閣府, 2014, p.11)。2013年には「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律(いわゆる障害者差別解消法)」が制定され、2016年4月から施行された。教育現場においても、「合理的配慮」の提供等が進められてきた(内閣府, 2014, p.5)。さらに、令和6年4月からは障害者差別解消法が改定され、民間の事業所(私立大学)においても合理的配慮の提供の義務化が始まる(内閣府, 2023, p.1)。また、「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」(文科省, 2012b, p.3, 2022b, p.4)においても、6.5%そして、8.8%と増加している。このような背景のもとで、「特別支援教育を担う教員養成の在り方等に関する検討会の報告書」(文科省, 2022a)では、中央教育審議会答申(文科省, 2021)で示された令和の学校教育の在り方、すなわち、「個別最適な学び」と「協同的な学び」を確保するために、「特別支援教育の考え方は、特別支援教育分野の専門性の向上や進展のみならず、また障害の有無に関わらず、教育全体の質の向上に寄与するものである」と述べられている(文科省, 2022a, p.2)。この「特別支援教育における検討会」では、「特別支援教育に関する知見や経験は、教育全体の質の向上に寄与することから、学校教育関係者のマインドを改革し、特別支援教育に関わる教師を増やしていくことが、学校教育を変えていくための鍵となるといえる」(文科省, 2022a, p.2)と示され、特別支援教育の専門性を持つ教員を増やすことの必要性について述べられている。しかし、現状では「特別支援教育に関わる教師が、他の教師に比べて、長期的視野に立って計画的に育成・配置されているとはいえない状況」(文科省, 2022a, p.5)と述べられているように、共生社会を担う児童生徒の教育を担う現場において、特別支援教育の視点を持ち、それを実践できる教員の養成が充実しているとは言えない現状が示されている。また、中央教育審議会答申(文科省, 2021, p.65)では、「新時代の特別支

---

<sup>1</sup> 山梨学院大学

援教育」について、「特別支援教育を担う教師の専門性向上」を掲げている。また、その答申では、「全ての教師には、障害の特性等に関する理解と指導方法を工夫できる力や、個別の教育支援計画・個別の指導計画などの特別支援教育に関する基礎的な知識、合理的配慮に対する理解等が必要である」(文科省, 2021, p.65)と指摘されている。特に ICT の活用が「⑦児童生徒の特性に応じたきめ細かな対応」の中で、「障害のある児童生徒については、ICT の活用が有効であることから、その整備を適切に行うことが重要である。～中略～加えて、音声読み上げやルビ振り等の機能を持つ学習者用デジタル教科書について、障害のある児童生徒や日本語指導が必要な児童生徒等に対する活用を促すことも必要である」(文科省, 2021, p.79)と述べられており、その ICT 活用について、特別支援教育の重要性も示されている。

さらに同答申では、大学の教職課程について「また、教職課程においては学生が ICT 活用指導力を体系的に身に付けていく必要があるため、各教科の指導法における ICT の活用について修得する前に、各教科に共通して 修得すべき ICT 活用指導力を総論的に修得できるように新しく科目を設けることや、修得した内容を学校現場において生かすことができるよう実践の総まとめとして位置付けられている教職実践演習において模擬授業などの ICT を活用した演習を行うこと等について検討し、教職課程全体を通じて速やかな制度改正等を行うことが必要である」(文科省, 2021, p.87)と述べられている。教職課程の集大成である、「教育実践演習」において ICT 等を活用した特別支援教育の視点をういた模擬授業の必要性は答申の中でもはっきりと示されている。

また、通級指導教室と通常の学級との連携について、治部は通常学級における発達障害等がある児童生徒への支援を行う通常の担任教師の困難さについて「担任教師が発達障害に関する専門的な知識や支援方法を学ぶだけでなく、通級指導教室の教師の支援や校内での連携により、学校全体で支援をして担任を支える必要がある」(2022, p.74)と述べている。さらに阿部は、レジリエンスを高める教育実践の中で「応答的大人の存在や安心できるような環境こそがレジリエンス育成の土台になると考えられる。学級での思いやりのある人間関係の環境を作ることが、生徒のレジリエンスを構築できる」(2023, p.66)とレジリエンスを高める教育実践、通級と通常の学級との連携の中で、土台となる学級経営について述べている。阿部は「通級の学びを日常生活に般化させていくには学級担任との連携は欠かせない」(2023, p.65)と述べているように、発達障害のある児童生徒を支援するためには通常の学級担任が特別支援教育の視点を持つことは必要不可欠であると考えられる。通級などの特別な場において支援者(指導者)が障がい等のある児童生徒に直接支援を行い、その生徒が在籍の教室に戻り、支援されたことを般化し、実践することが必要である。しかし、現実の現場では、個別配慮する通級指導教室と、環境が異なる通常の学級では困難さを伴う。特別な支援が必要な児童生徒を特別な場(通級指導教室等)で支援し、その生徒たちを通常に合わせようとする現在の方策も必要であるが、通常の学級担任がその支援方法(特別支援教育の視点・手法)を身に付け、担任として共に学び合う、共生教育を行うこと、通常の学級に在籍するいわゆる定型発達の児童生徒に対しての支援が必要であると考えられる。八木(2023)は、教職課程の集大成である「教育実践演習」で、将来の教育を担う学生たちに特別支援教育の視点をういて、模擬授業を行わせる実践を行っている。その中で八木(2023, p.43)は、特別支援教育の手法について、指導案の形式や教職課程全体における教職実践演習の模擬授業の位置づけなどについてより明確に位置付けることなどが今後の課題であることについて述べている。

以上のことから4年生後期の「教職実践演習」の中に教員を目指す学生が特別支援教育の視

点を用いた指導法を実践的に身に着けることは、現場に立った時必要不可欠になると考える。

## 2 目的

本研究は教職課程科目「教職実践演習」において特別支援教育の視点を学生がどれだけ兼ね備えているかを授業前後で調査、実態把握し、通常の学級における特別支援教育の視点を取り入れた模擬授業の有効性および昨年度八木(2023)が実践した研究結果と比較し、その中で違う学部での指導案作成を検証・再現しながら考察・分析することを目的とする。尚、本論文において「特別支援教育の視点を生かした授業」とは「特別支援教育の概念(一人一人の教育的ニーズを的確に捉え、個に応じた支援を行う)を通常の学級経営や授業の中に生かすこと」と定義する。

## 3 方法

本研究における対象学生は令和 Z 年度 A 大学教職課程に所属した「教職実践演習履修者 19 名」である。内訳は A 大学教職課程を履修している 2 つの学部「S 科学生 13 名, K 科所属学生 6 名」である。学生達には特別支援教育の視点をを用いた授業について、昨年度の実践例を提示しながら事前に説明・提示した上で、特別支援育の視点を取り入れた手法を組み込んだ模擬授業を実施させた。授業実践は後期 15 回の授業の最後の 3 回を実践時間に当てた。学生達に「事前事後 (Pre-Post) のアンケート」、「授業内での自己評価」、「授業外での課題(感想)」を書かせ、筆者が分析を行った。研究の同意については、アンケート用紙に研究に対する同意書を添付し、計 19 名(S 科学生 13 名 + K 科学生 6 名)全員に研究の同意を得た。尚、本研究は令和 5 年度山梨学院大学倫理審査委員会にて承認を得ている(受付番号 23-005: 2023 年 7 月 18 日承認)。研究の概要は以下の通りである(図 3)。図 3 は昨年度八木(2023, p.35)が実践したものに追加修正を加えたものである。

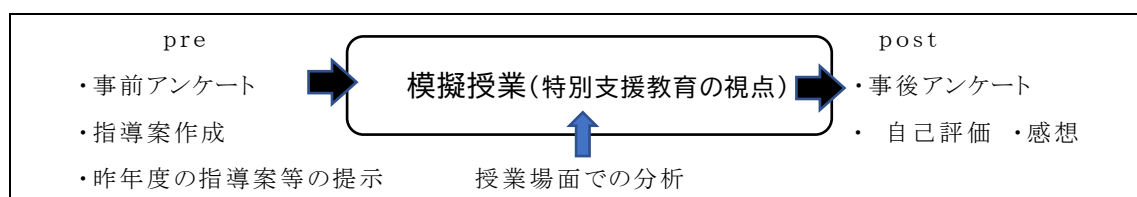


図3 研究の概要

### 3-1 指導案作成

指導案の形式について前期は教育実習用に学生が所属する学部の様式が指定されていたが、本研究において指導案の形式は教職実践演習が教職課程の集大成という意義(坂本, 2021, p.61)を踏まえ、今までの学生の学びと創意工夫を生かことから自由形式とした。また、八木(2023, p.37)が昨年度実施した授業についての指導案も事例として提示をした。学生には以下の説明の文書(図 3-1-1)を配布、掲示をしながら説明した。尚、この図(図 3-1-1)は、八木(2023, p.35)が使用したシートに追加・修正を加えたものである。

令和 X 年度 後期教職実践演習 最終演習 模擬授業 指導案(台本)作成について

目的: 特別支援教育の視点を入れた模擬授業・場面指導(ロールプレイ)を通して, 学校現場で対応が困難とされている, 特に通常の学級に在籍している発達障害がある児童生徒への対応力および実践的指導力を身に付け, 現場に立った時の一助とする.

1 概要 一人持ち時間15分(50分の授業計画の中の15分間の授業を行う)

\*S科 15分 K科 30分

～もしくは朝・帰り・給食・部活・などのSHL(短学活)でも可

・3人～4人グループを作り, その中で先生役, 生徒役を決める ・ロールプレイ形式を取り入れても可

2 学習指導要領に照らし合わせ・

・どんな場面で? ・何の授業? ☆どんな手法(特別支援教育の視点)を使ったか

・対象はだれか? について, 説明の上, 授業(ロールプレイ)を行う

3 特別支援教育の視点について

特別支援教育は, 障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち, 幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し, その持てる力を高め, 生活や学習上の困難を改善又は克服するため, 適切な指導及び必要な支援を行うものである. また, 特別支援教育は, これまでの特殊教育の対象の障害だけでなく, 知的な遅れのない発達障害も含めて, 特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全ての学校において実施されるものである(2007, 文部科学省通知より).

4 今後の日程について 指導案(台本)作成 ・形式は自由 枚数等・自由

指導案(台本)提出〆切 X月Y日(木) 23:59分

図3-1-1 模擬授業説明文書

### 3-2 分析方法

昨年度行った以下(1)～(5)について, 今年度も同様に模擬授業の有効性について昨年度との比較をしながら分析を行った.

(1) 事前・事後アンケート(Pre-Post)

(2) 指導案(場面・手法・対象生徒)

(3) 模擬授業実施場面(写真記録)

(4) 授業後の授業実践者の自己評価シート

(5) 授業者の授業実施後の感想(LMS:学習管理システム 以下 LMS)

「S科学生 13 名, K科所属学生 6 名」で年度当初履修登録をしていたが, S科では, Post時に2名欠席, K科ではPre時に欠席1名, Post時に欠席2名でありアンケート等の取得ができなかった. 以上のことから, 今回の本研究において, 対象とする学生はS科学生 11 名, K科学生 4 名, 計 15 名を分析対象学生とする. さらに, S科とK科では履修人数も異なり, 模擬授業の時間もS科では15分, K科では30分と異なるため, 分析の段階で模擬授業の指導案等も考慮し, 分析をした. 事前・事後のアンケートは, 八木(2023, p.41)が作成したものを検証し実施した.

### 4 結果

令和 Z 年度後期教職実践演習 15 回の内, 最後の 3 時間を使い, 模擬授業を実践した.

尚, 本研究においては, 前述したとおり, 実際に授業を行った学生の中から, 研究対象学生として, S科 11 名, K科 4 名 計 15 名を本論文に掲載する.

#### 4-1 指導案(場面・手法・対象者)

本年度は2つの授業の実践演習の授業で実施した。S科では13名 K科学生6名が後期教職実践演習を履修し、計19名が授業実践した。人数の関係もあり、S科については一人15分、K科については一人30分の時間内で授業を組み立てるよう指示を出した。前述した通り、今回分析対象とする学生はS科(11名)、K科(4名)計15名とする。学生15名が作成した指導案の形式および、設定した「場面・手法・対象者」は以下の通りである(表4-1, 表4-2)。指導案の形式については昨年度八木(2023)が設定したものと同様に「①通常の定型, ②簡条書き形式, ③台本形式 ④他」で分類した(表4-1)。その結果、通常の形式①は10名(S科6名, K科4名)、簡条書き形式②は3名(S科3名)(図4-1-1)、台本形式③は2名(S科2名)(図4-1-2)、であった。昨年度の八木(2023)の研究では通常の形式と簡条書きが拮抗していたが、今年度はほぼ8割が通常の形式であった。

表4-1(S科11名 場面・手法・対象者一覧) 15分バージョン

	形式	場面	手法	対象者
学生 S-1	③	○道徳	◆ICT(PC)	中2, 会話が苦手な生徒
学生 S-2	③	○道徳	◆ICT(PC) グループワーク ワークシート	中2自分の意見が言えない 生徒
学生 S-3	①	○学級活動(LHR)	グループワーク	支援学級に在籍している生徒 (交流学級)
学生 S-4	①	○道徳	◆ICT(PC) ペアワーク	発言が苦手な生徒
学生 S-5	②	●総合的な学習の時間	ペア学習	様々な事象を調べたり, 得られた情報をまとめたりすることに困難のある生徒。人前で発表することが苦手な生徒
学生 S-6	②	●学級活動(SHR)	黒板に記載する	特に明記無し(全体)
学生 S-7	①	○学級活動(LHR) 「ユニバーサルデザイン について」	◆ICT(PP) グループワーク	意見が言いにくい生徒
学生 S-8	①	●朝の会 入学後のHR	◆ICT(PP)	高校1年生(全体)
学生 S-9	①	○学級活動	ペアワーク PA ペアワークグル ープワーク	中1 情緒障害
学生 S-10	①	●学級活動(SHR) 朝の会 避難訓練の説明	◆ICT(PP) 対話	通級に在籍している生徒
学生 S-11	②	●学級活動(SHR) 4月(目標決め)	対話	中学1年生

表4-2(K科4名 場面・手法・対象者一覧) 30分バージョン

	形式	場面	手法	対象者
学生 K-1	①	○授業(商業) 調べ学習	◆ICT(PC) グループワーク	高校2年生 ADHD(落ち着きがなく、 周りと同じように行動することができな い生徒)
学生 K-2	①	○授業(商業)	◆ICT(PC) グループワーク	高校1年 (具体的に設定なし)
学生 K-3	①	○授業(商業)	ワークシート(教 材)の拡大	発達に特性があり、文字が見えず らい生徒
学生 K-4	①	○授業(商業)	グループでの 調べ学習	高校3年生, 社会人になる生徒

模擬授業構想

① 道徳の授業

② ICT(パワーポイント)を使った授業

③ 自分の意見を中々考えられない、発言できない生徒を対象

④ 最初にやるべきことを提示し、活動中は声掛けを積極的に行う

授業の流れ

導入: あいさつ 本時の説明

展開: 1, 4コマ漫画を見てもらう

2, 個人ワーク(5分)

→声掛けを行い、全員に意見を持たせる

3, グループワーク(5分)

→司会を決めさせ、一人一回自分の意見を発言するようにさせる

まとめ: 今日の授業を活かして他の授業でも自分の意見を考えたり、発表させるように意識  
付けさせる

図4-1-1指導案(箇条書き形式(学生 S-2) 模擬授業構想シート

## 教職実践演習指導案

〔想定〕

- ・ 中学 1 年生 4 月
- ・ 体育「体づくり運動」導入部
- ・ 情緒障害を持つ生徒（通級している）

〔授業内容〕

実施内容	指導上の留意点 ◆努力を要する生徒への支援
1. ジャンケン自己紹介	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2 人組を作らせる</li> <li>・ ジャンケンをし、勝った方が負けた方に質問する</li> <li>・ 負けた方は質問に答える</li> <li>・ 質問に答えた後、ペアを変え実施する</li> <li>◆スムーズにペアを作れるように支援する</li> <li>◆指示は簡潔に分かりやすく</li> </ul>
2. 紙キャッチ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2 人組を作らせる</li> <li>・ A4 の紙を丸めボール状にする</li> <li>・ 片方が投げ役、もう片方がキャッチ役になる</li> <li>・ 先生が言った場所でキャッチをする (例：「背中」→背面でキャッチ、「頭」→頭上でキャッチ)</li> <li>・ 一回毎に役割を変えながら実施する</li> <li>◆失敗をしても不満を言わないように事前に周知する</li> <li>◆情緒障害をもつ生徒がいる側はなるべく簡単な場所を言う</li> <li>◆成功したら称え合う</li> <li>◆指示は簡潔に分かりやすく</li> </ul>
3. 人間知恵の輪	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5 人一組を作らせる</li> <li>・ 手をつなぎ合い一つの輪を作らせる (隣同士では手をつながないようにする)</li> <li>・ それを協力してほどく</li> <li>・ 5 人組が終了した後、10 人組を作らせて実施する</li> <li>◆強い言葉で指示をしないように事前に周知する</li> <li>◆成功したら称え合う</li> <li>◆指示は簡潔に分かりやすく</li> </ul>

図4-1-2 指導案（箇条書き 学生 S-9）体づくり

## 4-2 模擬授業の様子

模擬授業は授業時間において計3日間行った。事前に指導案を提出した学生は19名であったが、当日内容を変更した学生も見られた。授業場所は通常の講義を行う教室であり、最大90名が入る講義室である。学生たちはその講義室を教室に見立て、場面に応じて協力学生に生徒役を依頼し、授業を行った。

初日はS科学生3名、K科学生1名、計4名行った。学生S-2は道徳の授業を行い、パワーポイント資料(以下PP)を活用し、発言が苦手な中2の生徒を対象に設定した。4コマ漫画等の絵を提示し、視覚的に支援をした内容であった。学生S-3は短学活(以下SHR)の場面で、卒業後の進路について、グループワークを行い実践した。黒板を効果的に使用し、文字で視覚的に提示をした。学生S-7は題材を「ユニバーサルデザイン」とし、PPを活用し、視覚的に分かりやすく進めていた。実物なども使用し、生徒がとても理解しやすい内容であった。学生K-1は高校2年生の発達障害(ADHD)のある生徒を対象として、商業科(財務会計)の授業を行った。30分という時間ため、通常形式の指導案を作成し、授業に臨んだ。PPに本日の流れが視覚的に明確に示され、とても分かりやすく工夫されていた(図4-2-1)。



図4-2-1 (模擬授業の様子 学生S-2 学生S-3 学生S-7 学生K-1)

2日目はS科学生5名((学生S-4, 学生S-5, 学生S-6, 学生S-8 学生S-9), K科学生2名(学生K-3, 学生K-4)の計7名が行った。学生S-4は場面を道徳の授業, PPを使い, 発言が苦手な生徒を対象にペアワークを使い実践した。無理に発言させず, 生徒の様子をきちんと把握して授業を進めていた。学生S-5は総合的な学習の時間を使い, 人前で発表が苦手な生徒を対象とした。学生S-6は新年度に入り, 目標設定について, A4(1枚)の用紙に視覚的に記述させていた。学生S-8は入学後の高校1年生の朝のSHRを場に設定し, PPを用い, 無理なく1日の目標が建てられるように実践した。学生S-9は中学1年生, 入学間もない1年生の中で情緒障害を持つ生徒を対象とした, 体づくりの授業展開を行っていた。テンポよい



アクティビティが続き、対象の生徒も楽しく輪の中に入れるように工夫された内容であった(図 4-2-2)。



図4-2-2 (模擬授業の様子 学生 S-4 学生 S-5 学生 S-6 学生 S-8 学生 S-9)



図4-2-3 (模擬授業の様子 学生 K-3 学生 K-4)

K 科の学生 K-3 は文字を読むことが苦手な高校生を対象としたため、使用するテキストの1つを拡大して準備し、授業に使用した。学生K-4 は商業科で高校 3 生、次年度社会人になる学生を対象に、調べ学習を行った。板書を見やすくし、工夫して説明をした(図 4-2-3)。

最終日(3 日目)、S 科学生3名((学生 S-1, 学生 S-10, 学生 S-11)、K 科学生1名(学生 K-2)が実践した。学生 S-1 は道徳の授業を設定し、PP を用いて、会話が苦手な生徒を対象として授業を組み立てた。学生 S-10 は避難訓練を説明するための SHR(朝の会)を設定し、PP スライドを用いて、視覚的に分かりやすく説明をした。学生 S-11 は入学後の生徒を想定し、目標決めをグループワークで行っていた。K 科の学生K-3 は商業科の高校生を対象に、資本主義についてPPを使い、視覚支援を行っていた。



図4-2-4 (学生S-1 学生S-10 学生S-11 学生K-2 )

### 4-3 自己評価シートの感想

授業を実践した学生にその日の授業内で自己評価シート（表 4-3）に自己評価を記述させた。

表 4-3 授業者コメント

<p>○初日(S科3名 K科1名)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・短い時間でも自分の計画通りに進めることができ、後悔なく終わることができたので最後いい形で終わることができた学生(S-2)。</li> <li>・自分の理想通りの授業が展開できたのでとても良かった学生(S-7)。</li> <li>・分かりやすい授業ができました(学生S-3)。</li> <li>・作った補足説明を常に見える所に出すや板書として残すなど作った資料をよりうまく使うことができたなど思いました。また、個人ワークが多かったため、初めにグループを作ってもらうなど工夫すべきだったと思いました(学生K-1)。</li> </ul> <p>○2日目(S科学生5名((学生S-4, 学生S-5, 学生S-6 学生S-8 学生S-9), K科学生2名(学生K-3) 学生K-4) の計7名</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・もっとやりたいことを明確に伝えてスムーズに進めたかった(学生S-4)・少し予定していた内容が飛んでしまい、変わってしまったが、内容としては筋が通っていたので良かった(学生S-5)</li> <li>・15分間という中で、やることを考えていくのがとても難しかった(学生S-8)</li> <li>・時間配分は上手くいった。声かけや指示の仕方を簡潔にすべきだった(学生S-9)</li> <li>・準備することはやはり大切だと思った。イレギュラーにも対応できるように常に準備していきたいです(学生K-3)</li> <li>・私自信も社会人となり、知っておくべきことを伝えたいと思い、単元を選んだ。準備が少なかったものでこれからは入念な準備をしたい(学生K-4)</li> </ul> <p>○3日目(S科学生3名((学生S-1, 学生S-10, 学生S-11, K科学生1名(学生K-2)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業をしっかり思考して、特別支援の観点を入れられたのでとても自分的にはとても良かったです(学生S-1)。</li> <li>・もう少し、生徒同士の活動を入れれば良かったかなと思いました(学生S-10)。</li> <li>・学活の授業は初めてだったので少し緊張した(学生S-11)。</li> <li>・授業時間を考えながら、グループワークや発問を行うことは難しいと感じた。事前の準備は沢山することに越したことはないと思った(学生K-2)。</li> </ul>
--

### 4-4 授業外の課題(LMS)

模擬授業後、授業後の事後課題として学習管理システム(Learning Management System:LMS)を使い、学生たちに再度授業をじっくり振り返らせ、事後に課題として提出させた。特別支援教育の視点の授業の意図をより深く捉え、自己の振り返りがされていると筆者が判断した学生を2名(学生S-2 S-3)を抽出した(表4-4-1)。また、参観していた学生の意見(学生S-8 学生S-10)も掲載した。(表4-4-3)

表 4-4-1 (学生 S-2 学生 S-3)

・模擬授業を実施して感じたこととして、15分という短い時間の中で特別支援教育の視点を取り入れた授業ということで、実施する前は展開するのが難しいかなと感じたが、自分から発言するのが難しい生徒を対象にし、グループワークや発表を取り入れたりして、発言する機会をたくさん作った授業を展開してやってみたら思ったよりスムーズに授業を進めることができた。また、自分が思い描いていた通りにできたと思うので、最後の集大成としては個人的に良かったかなと思った。自分は授業を行う上で4コマ漫画を取り入れたが、文字だけだとつまらなくて飽きてしまうと思い、こういう要素を取り入れてみたら全員が意見をスムーズに書いていたので効果があったのかなと思ったので良かった。最後に自分は人前で話すことが苦手だったが、教職の授業の中での模擬授業を何回か繰り返えしたり、教育実習での貴重な経験もあり、苦手意識も減っていき、自分の中で大きく成長することができたので良かった(学生 S-2)。

・今回の授業では、支援教育を活用した授業を行い新しい試みになりました。授業内容として、グループ活動を利用した話し合いや生徒全員が平等で、お互いの意見を尊重することを意識させることができました。他の発表でも、ペア学習や生徒同士の事を知る機会になるようなアイスブレイクもあって、様々な方法があるといったことが学びました。アイスブレイクの中にも、障がいをもった生徒達が簡単にできる内容になっており、自然と全員が笑顔で一体感ある授業となっていたので、自分が教員となった時に活用したい内容だと感じました。自分は、少し難しい内容になってしまったため、より簡単で全員が馴染めるような内容にできればよかったですと思います。他にも、様々な障がいを持った生徒達の特徴を理解し、受けやすい形で授業を行える環境を整えていたことは良い発想だと感じ、自分も行っていきたいと思います。今後の活動でも、意識することや気を遣っていかなくてはならないところに細心の注意を払って授業を行っていきたいと思います(学生 S-3)。

表 4-4-2(学生 S-8 学生 S-10)

・15分ということで、今までの模擬授業とは違いかなり短い時間での模擬授業だった。みんな、特別支援教育についての視点(として、みやすいように四コマ漫画なり、パワーポイントなりを使い、障がいを持っている人に対する配慮がしっかりとできていたと思う。話し方も聞きやすい速度と、音量で聴いているだけでも理解ができる授業展開ができていたと思う。年明けには自分も発表する番になるので、しっかりと参考にしながら、きちんとした視点と授業内容を行っていきたいと思う(学生 S-8)。

・15分程度という短い時間の中でも様々な工夫を凝らして、なるべく生徒が主体の形にしようとし、アクティブラーニングの形が取れていたのが良かったと思いました。また、支援する生徒の形も明確にされており、この時間ではこういう生徒に焦点をあてるということやこの時間はこういった力を養うということが非常にわかりやすかった。多くの人はペアワークやグループワークを取り入れており、生徒同士の話し合いを進める内容であった。短い時間ながらも生徒同士で話し合い考えさせるということは難しいと思ったが、教師役の方が上手くグループ分けをスムーズに行ったり、生徒の会話に入ったりなどをして上手く短い時間で話し合いの内容をまとめ発表するという授業らしい形にできていた。また、その時間で達成するべきこともみんな達成できていたと思うので、とても良かったと思います(学生 S-10)。

#### 4-5 アンケート結果

本研究の有効性を確認するために、学生に対して授業前後(Pre-Post)のアンケートを実施した。本アンケート(表 4-5-1, 図 4-5-2)は八木(2023, p.41)が実践した内容を再検討し、加筆・修正し使用したものである。アンケート項目は①「特別支援教育の視点の授業の有無」(図 4-5-1), ②「授業を実施した場合の内容(場面)」(表 4-5-1), ③「通常の学級における特別支援教育の視点の必要性の意識」(図 4-5-2)の3点である。また、Post時には、特別支援教育の視点を入れた授業を行っての感想を学生に記述させた(表 4-5-2)。

\*Pre 教職実践演習初日（令和 X 年 9 月）

Post 教職実践演習最終日（令和 Y 年 1 月）

設問 1

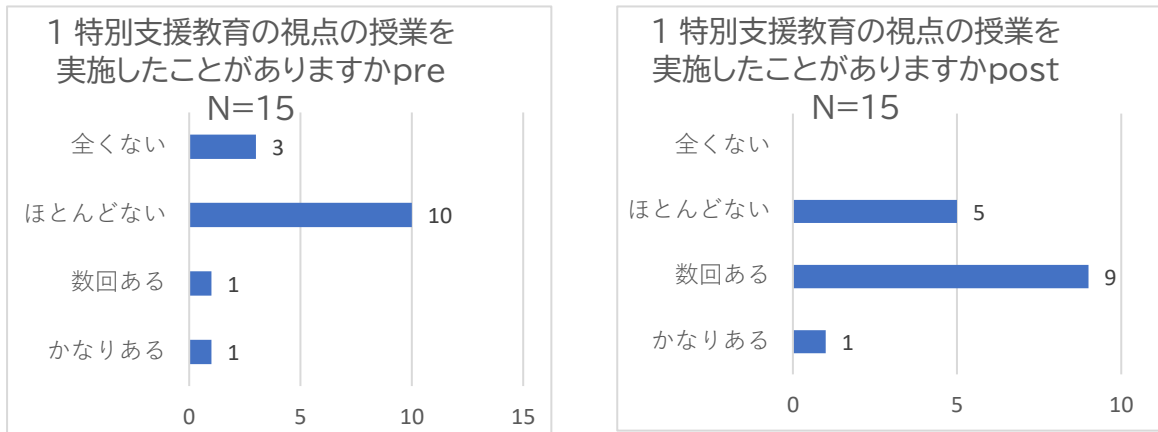


図4-5-1

設問 2 「特別支援教育の視点を取り入れた授業を実践したことがある時、どのような時間（場面）で実践しましたか。

表 4-5-1

Pre	実践回数(2回)
Post	実践回数(10回)

設問

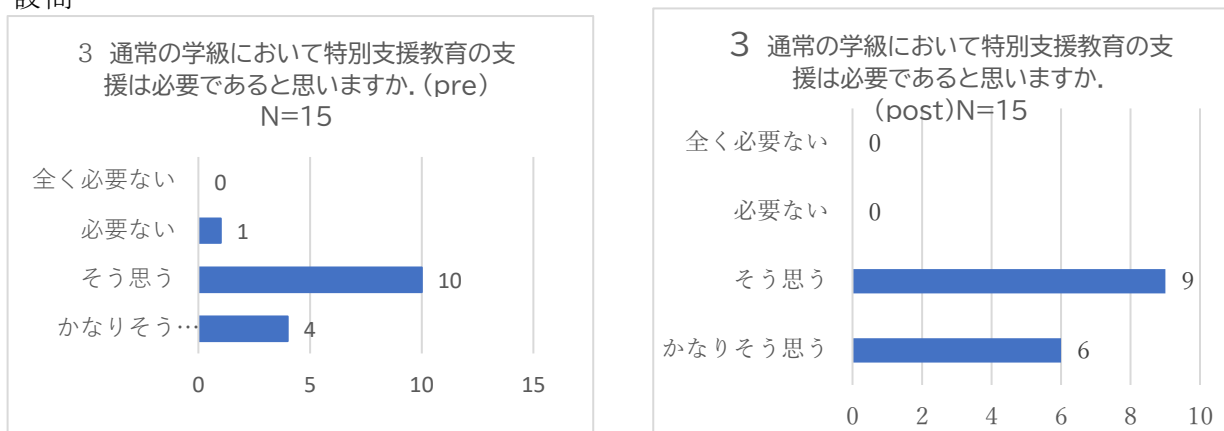


図4-5-2

表4-5-2 授業後の感想(post)

・支援を意識した授業が初めてだったことでとても新鮮でした。この授業を行うまでは通常級に支援を必要としている生徒がいることを考えたことがありませんでした。しかし、支援を必要としている生徒がいるきっかけになり、自分が場面を想像して、授業をできたことでより現場に近い授業ができたのではと思いました(学生 K-3)

・難しさもあるが、とてもいい勉強になった(K科 学生 K-4)。

・やることを具体的に話して指示したり、パワーポイントの文字の大きさや文字体を変えたりして行きよかったです(学生 S-1)。

・対象者を決めて授業を行ったので、その対象者への手立てを意識して、授業を行ったので、なかなかスムーズにいかない部分もあり、難しかったが、結果として全員が自分の考えを伝えられていて、目標は達成できたので良かったと思う。また、授業を行う際にはどの生徒を対象に行うかが大事なることを理解できたので、生徒への手立て、アドバイスを大事にしたいと思った(学生 S-2)。

・時代と共に ICT、機器の使用などで分かりやすい授業ができていないのではないかと感じました。

・まず、どのような生徒と対象に対して、どのような支援を行うのかを考えるのが大変だった。また支援が必要な生徒だけに配慮を心掛けてしまうと、一般の生徒に物足りないと思うことが大変でした。みんなの前で授業するのはあまり緊張しないで成長が感じられました(学生 S-5)。

・当たり前の流れや展開を作るのではなく、いろいろな角度から見て、様々な可能性や展開を考えることが大切だと感じた(学生 S-6)。

・いつもと違う支援を取り入れる難しさを改めて実感した。このような視点がいつでも取り入れられるようにしたい(学生 S-7)

・どう対応していいか分からない部分が多くて大変だけど、教師になる以上必要な視点だったので、きちんと調べて実践することができたのは良かった(学生 S-8)。

・特別な支援をしなければならないが、周囲の他の人にも努力を要する生徒はもちろんいて、どちらにも支援の手立てや実践をするという面でとても難しかった(学生 S-9)。

・形式的な知識しかないため、何度も実践・反省を繰り返して、経験を深めないといけないと感じました(学生 S-10)

・ペアワークなどで一人一人が話すことができていたので良かった(学生 S-11)

## 5 考察

今回の結果について、1「指導案・手法」、2「自己評価シート・LMSでの振り返り」、3 参観した学生の意見、4 アンケート(pre-post)結果の4点を中心に考察を述べる。

第1に、指導案・手法について、S科では15分という短い時間であったため、50分の中からの抽出というよりも朝の会、帰りの会などの時間において通常の指導案形式で組み立てた形が6名、K科では4名計10名が通常の指導案形式で作成していた。昨年度の八木(2023)の研究では通常の形式と箇条書きが拮抗していたが、今年度はほぼ8割が通常の形式であった。事前に昨年度の例を提示したこともあり、指導案の形式で悩んでいたというよりも、通常の形式でまとめた形が学生の中では定着したものと考えられる。特にK科では30分という通常に近い形であったことも要因として考える。その中でも、箇条書き形式・台本形式を取り入れた学生も5名おり、創意工夫が見られた。手法に関しては、支援が必要な生徒に対して、ICTのPPを有効に活用した学生が8名と約半数の学生が効果的に使用していた。また対象の学生であるが、「発言が苦手な生徒」「意見が言いにくい生徒」と明確に対象を設定した学生は7名であった。昨年度の八木(2023, p.43)では「学生の視点が様々ながらも困難を抱える状況を学生の視点から設定した」とあるが、今年度も同様に学生の視点から明確に設定した学生がいることが示された。しかし、特に具体的に対象を設定せず、大まかに学年、もしくは支援学級の生徒と設定している学生も見られ、今後、対象を明確に設定するように指示を行う必要があると考える。

次に授業の振り返りとして行った直後の「自己評価シート」及び「LMS」についてであるが、授業直後の「自己評価シート」では「自分の計画通りに進めることができ、後悔なく終わることができた」や「自分の理想通りの授業が展開できたのでとても良かった」など、模擬授業を年間通して行ったことの効果が示されていた。また、「授業をしっかり思考して、特別支援の観点を入れられたのでとても自分的にはとても良かったです(学生 S-1)」など今回の特別支援教育の視点を意識し、振り返る意見があった。しかし、反面「15分間という中で、やることを考えていくのがとても難しかった(学生 S-8)時間配分は上手くいった。声かけや指示の仕方を簡潔にすべきだった

(学生 S-9)」などと具体的な対応について難しさを感じている学生もいた。また、事後にじっくり振り返り後のLMSの意見として「模擬授業を実施して感じたこととして、15分という短い時間の中で特別支援教育の視点を取り入れた授業ということで、実施する前は展開するのが難しいかなと感じたが、自分から発言するのが難しい生徒を対象にし、グループワークや発表を取り入れたりして、発言する機会をたくさん作った授業を展開してやってみたら思ったよりスムーズに授業を進めることができた」や「アイスブレイクの中にも、障がいをもった生徒達が簡単にできる内容になっており、自然と全員が笑顔で一体感ある授業となっていたので、自分が教員となった時に活用したい内容だと感じました。」など自己をじっくり振り返り、メタ認知(三宮, 2008)を働かせ、学生が考える結果が示されていた。さらに、参観した学生の意見(LMS)では「みんな、特別支援教育についての視点(として、みやすいように四コマ漫画なり、パワーポイントなりを使い、障がいを持っている人に対する配慮がしっかりとできていたと思う)や「支援する生徒の形も明確にされており、この時間ではこういう生徒に焦点をあてるということやこの時間はこういった力を養うということが非常にわかりやすかった」など、参観している学生からも、今回の、模擬授業の有効性が明確に示されていた。3点目としてPre-Postのアンケートからも学生の意識の変容が確認できた。特に設問3においてpreにおいて「必要ない」と回答した学生(S-8)は授業前には「教師の目線では必要であると考えてるが、生徒の立場では今自分が置かれている状況で精いっぱいと思うので必要はない」と答えたが、postでは「通常学級にもその視点を必要とする生徒がいるから」と回答に変容が見られた。またpreにおいて「そう思う」と答えた学生(S-2)はpostにおいて「かなりそう思う」と答えており、「全員に平等に授業を伝える必要がある」と明確に答えている。設問3の「かなりそう思う」の人数が4名から6名と増加しており、昨年度八木(2023, p.42)が「特別支援教育の授業を行う学生がPDCAサイクルを実践した結果である」と述べているように、昨年度と比較しても今年度もその有効性が示された。最終授業として、全ての学生が落ち着いて、授業を進めていた(図4-2-1 図4-2-2 図4-2-3 図4-2-4)。また、S科、K科の学生の作成した指導案の形式がそれぞれ学部独自の特性が見られ、特別支援教育の視点を学部独自の形として見られた。今後の課題として、以下の3点が挙げられる。第1に「対象を明確に設定するように指示を行う必要がある」と考える。前述したように特別支援教育の視点を授業に落とし込むためには、一人一人の教育的ニーズを的確に掴むことである。今回の模擬授業では「手立て」はある程度考えられていたが、その手立てを対象のどこに用いるのかをより明確に示す必要がある。と考える。今回K科の学生(K-3)が文字の読みが困難な生徒を対象にし、手立てとして「拡大文字」を用いた実践が見られたが、この学生のような視点をすべての学生が明確に示す必要がある。第2に事前の指導案作成等の時間確保を行い、構想をより深くすることが必要であると考えている。教職実践演習の最後の3時間を用いたが、そこに至るまでの教師側の授業計画を再度見直す必要もあると考えている。授業前の「ガイダンス(事前の説明)をもう少し、丁寧に踏み込んだ上で行う必要があると考えている。もし可能であれば、特別支援教育で用いられている「個別の指導計画」などを例示し、具体的に指導案や台本、簡条書きの計画段階に、盛り込むことでより深い模擬授業が実施できるのではと考える。八木(2023, p.43)も「教育課程の全体の中における教職実践演習の内容を確認した上で模擬授業の位置づけをより明確にする必要がある」と述べているように今後の授業計画と合わせて検討する必要がある。

第3点として、事前に行う特別支援教育の視点について、学生がどの程度掴んでいるか、学生の実態をより詳しく掴んだ上で、模擬授業の実践を行う必要があると感じる。事前・事後のアンケート等の検証をどのように行うか、アンケートの形式も八木(2023, p.41)が実践したものと今回の内容を比較・検証しながら改善・検討が必要であると感じる。

## 6 おわりに

かつて筆者が高校現場にいる時、発達障害(ASD)の診断を受けていた生徒が在籍している学級に、教育相談部巡回支援員として、巡回支援をしている時のことである。発達障害(ASD)の診断を受けたAさんは、その障害特性から、ざわついた教室の環境が落ち着かず、頭を掻きむしり、いらいらして暴言を吐いていた。その時その様子を見ていた同じクラスの男子生徒のS君が「しょうがないね、Mちゃんはそうなんだよね。大丈夫、大丈夫。」と誰に言うことなく言葉を出し、その後、クラスでは何事もないかのように、授業を進めていた。そのことを巡回後、当時の学級担任のT先生に伝えると「そうですか、Sはいいやつですね。」と一言話をさせていただいた。学級担任のT先生は、朝の会や帰りの会等、折に触れ、生徒の多様性、個性の尊重、障害という言葉は使わないにせよ、いろいろな生徒がいること、お互いを大切にすること・・・を話していた。私も巡回支援で度々教室に伺った時、何度かその場面に遭遇した。とても暖かい学級であったと記憶している。Mさんとは、入学前に入学前相談の場で保護者と一緒に会ったのが最初であった。中学時代はその障害特性からクラスになじめず、別室登校をしていた生徒であった。保護者の方もとても心配そうであったが、当時の学年主任のI先生は「大丈夫ですよ。きちんと支えますね。」と優しい声をかけていただいた記憶がある。その後、Mさんは担任T先生のクラスで3年間を無事終え、大学に進学し、得意の理科関係の学修を続けているとのことである。

現在、特別支援教育が進み、通級等の支援も充実してきているが、その生徒は通常の学級に前提として、まず在籍しなくてはいけない。その通常の学級を支えるのは紛れもなく学級担任であり、その学級担任を養成する大学の教職課程の責務はとても重いと感じる。筆者も長年学校現場で学級担任を務めてきたが、今から約30年前、まだ新任の教員であった筆者に、当時のK校長先生は「学級の級風作り、それが大切だよ。」と常に話されていた(八木, 2013, p.47)。K校長は「学級通信を必ず出すんだよ、担任の思いを伝えることが大切だよと・・・」常に筆者たちに伝えていた。その当時はまだ特別支援教育という言葉はなかったが、共生教育の基盤、安心して過ごせる学級の級風作りが今進められている特別支援教育の基盤であること確信している(八木, 2013, p.47)。現在、筆者は大学の教職課程で将来の教育界を担う学生たちを指導する立場で2年が過ぎようとし、来年は3年目を迎える。今、筆者に与えられた使命の重さを自覚しながら、可能な限り、次代の教育を担う意欲に燃えた教職課程の学生達の育成を続けていこうと思う。

## 引用文献

・阿部愛香(2023)「レジリエンスを高める教育実践ー通級と通常学級との連携を通してー」

琉球大学院教育学研究科 高度教職実践専攻課題研究中間報告



- ・治部雄都(2022)「通級指導教室を利用する生徒が在籍する通常学級の担任教師が行う学級経営の工夫」学  
校臨床心理研究 北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻研究紀要 第19号 p.74
- ・文科省(2007)「特別支援教育の推進について(通知)19文科初第125号(平成19年4月1日)
- ・文科省(2012a)「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」  
特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告1 (2012年7月13日)
- ・文科省(2012b)「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒  
に関する調査結果(平成24年2月実施)
- ・文科省(2021)中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して～すべての子供たちの可能性  
を引き出す、個別最適な学びと協同的な学びの実現～(答申)」(中教審第228号)令和3年1月26日
- ・文科省(2022a)「特別支援教育を担う教員養成の在り方等に関する検討会議報告書」令和4年3月31日  
～特別支援教育に関わる教師の専門性向上に向けた方策～
- ・文科省(2022b)「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」  
(令和4年12月13日)文部科学省初等中等教育局特別支援教育課報告
- ・内閣府(2014)「平成26年版 障害者白書」p.11  
<https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h26hakusho/zenbun/index-w.html>  
(2024年3月9日検索)
- ・内閣府(2013)HP「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」p.5  
<https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai.html>(2024年3月9日検索)
- ・内閣府(2021)HP「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律の一部を改正する法律(令和3年法律第  
56号. 令和3年6月日公布」p.1  
<https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai.html>(2024年3月9日検索)
- ・坂本昌弥(2021)「実践的指導力を育成する教職実践」～教職履修カルテの在り方と活用について～  
紀要 viso research repory =Visio51 巻 pp.61-66 九州ルーテル学院大学
- ・三宮真智子(2008)「メタ認知 学力を支える高次認知機能」北王路書房 pp.56-57
- ・八木悟(2013)「障害の有無に関わらず自己存在感あふれる学級づくりを通して」  
明治図書「多様な学びを支える LD.ADHD&ASD(2013)7月号 pp.46-47
- ・八木悟(2023)「教職課程における特別支援教育推進の方策-教職実践演習における特別支援教育の視点を  
組み込んだ模擬授業を通して-, 山梨学院大学 教職課程教育研究2巻第1号 pp.33-44